

---

 会 長 講 演
 

---

## 看護の原点をたぐりよせて

## Drawing the Origin of Nursing

岡崎美智子 Michiko Okazaki (国際医療福祉大学)

---

 キーワード：ヒューマン・ケア、触れる手、コミュニケーション、看護倫理

key words : human care, touch, communication, nursing ethics

## はじめに

第12回日本赤十字看護学会学術集会のメインテーマは「看護の原点をたぐりよせ未来につなぐ英知」とした。看護はいつでも、どこでも、劣悪な環境においても人々の健康を守り、その人にとって心地よい環境を整える担い手として、看護実践の中から看護文化である知的財産を創りだしてきた。それらの知的財産は今日、家族、病院の臨床から地域社会へ、さらに国際社会へと拡大してきた。このような広がりを志向しつつ、先人たちの汗の結晶として創りだされてきた看護文化を、「今・ここで」再確認してみたいと考え学術集会を企画した。

この会長講演は、「あらためて看護の原点とは」「看護専門職として見失ってはならないものは」「社会の人々は看護職に何を求めているか」「今を生きるその人のいのちを、生き生きと輝かせることのできるケアリングとは」など、限りない問いから生まれた。

最初に学術集会企画中に起こったショッキングな出来事、「311:東日本大震災」について記しておきたい。この惨事を経験し、あらためて看護職独自の働きの素晴らしさと、多専門職と連携しながら発揮した看護職のマネジメント力の偉大さを実感できた。それらの事は、いち早く学会員・理事会から連絡が入り、学術集会プログラムの追加・修正を行う嬉しい悲鳴の作業であった。特に、指定交流会Ⅲ災害看護活動委員会による「東日本大震災における赤十字救護班看護師の活動経験知と今後の課題」、日本赤十字社制作によるDVD上映「①赤十字は被災者の近くに東日本大震災 ②東

日本大震災～被災地での40日間～」、写真展「東日本大震災被災地の救護活動」は、参加者の注目を浴び、その後続く学会等においても取り上げられた。

東日本大震災は未曾有の災害であり、第二次世界大戦後の日本と同じ状況であるといわれている。ここに多くの人々の命が奪われ、長年築きあげてきたものが一瞬にして奪われていった。この状況を目の当たりにした関係者の気持ちを推し量ることは到底できないが、今回の事態を理解し、いち早く行動し、今後の成り行きを見守り、積極的な参加をしていくことはできる。また、積極的な参加が出来ない人は、そばに居るだけでも遠くから見守りだけでも、当事者に勇気と生きる希望を与えることはできる。

地球・科学・火山学の研究者、鎌田浩毅教授（京都大学）は、「今回の東日本大震災は、千年ぶりの巨大規模の地震であり、津波だけでなく原子力事故があったものの、それを除いてもショッキングな出来事であった。」と、鷲田清一先生との対談の中で語っておられた（明日の友、192号、2011）。

<第12回日本赤十字看護学会学術集会講演集の表紙に寄せて>

看護の原点を紐解くにあたり、看護ケアを行う手の働きに注目して、第12回学術集会企画委員の手造りでこの表紙は出来上がった。

真ん中の手は小学校1年生の男子生徒の手、彼は入学式の日に分自分で二葉の芽を探し、腐葉土に二葉の芽を植え彼の父親に見せたところをシャッター・チャンスとしてとらえた。



写真提供：増満 誠（国際医療福祉大学）

心を静めてこの表紙をみると、二葉のみずみずしさが迫り来て、躍動感を与えられる。はるかなるかなたに「虹」を戴くことで、心に希望が生まれてくる。時、同じくして今回の東日本大震災も大きな変わり目になる。今はどん底でも、どん底より下はない。上がっていただけだと信じることで、それが希望につながる。このような企画委員一同の思いが込められている。

ユネスコ（UNESCO：United Nations Educational Scientific and Cultural Organization）は、21世紀に向けて「経済発展」に代わる「人間発展（Human Development）」の概念を打ち出した。この概念の核になるのが「Caring」である。すなわち、ユネスコはCaringの考えを基本として教育や科学の建て直しを図ろうとした。

今、人々が古くから継承してきた「ケアする」価値観が見直されている。東日本大震災の経験は、人々に個人、社会、国家のあり方について再考と変革を求めるきっかけを与えた。社会全体がケアすることを学ぶ必要があり、ケアする能力とスキルを持つ人々の育成が大きな課題である。

## I. 「Caring」の中核となる考えを、赤十字の基本理念「人道」からたぐり寄せて…

国際的に活動している赤十字人は、「人道（Humanity）」を中核に置き「何を信じ、どこへ向かって進み、どのような役割を果たすか」をはっきりとさせてきた。この基本理念はあらゆる状況下において、人間の苦痛を予防し軽減することに国際的・国内的に努力することであると共に、生命と健康を守り人間の尊重を確保するとされた今日的な赤十字活動の使命と言える（浦田、2010）。

ピクテ（Pictet, 1955）は『赤十字の諸原則』を、基本的諸原則として「人道、平等、比例、公平、中立、

独立、世界性」の7つを、機構的諸原則として「無欲、無料、志願、補助、自治、大衆、赤十字の平等、単一、相互依存、先見」の10をあげている。これらの基本的諸原則は、あらゆる場で実践し応用されるものであり、機構的諸原則と基本的諸原則は相互に密接な関係がある。原著はフランス語で書かれている。その翻訳者井上は、当時日本赤十字社外事部長であった。私は、日本赤十字幹部看護師研修所において講義を拝聴した。その中で印象に残っていることは、「確固たる基礎を有する一つの原理を持つことは、特に必要である。赤十字の事業は一つの高い理想から生まれており、そこから不断に新しい生命を吸収している。それは、アンリー・デュナンがソルフェリーノの戦場で傷病兵を看護しながら、それも前例のない国籍による差別を設けない行為の中から生まれた。どんなに機構が立派であっても魂が抜けていれば何になろう。赤十字は常にその生まれたくはじめの泉から新しい力を引き出していくように心がけねばならない。」の理念である。

この赤十字の理念は、地下水のごとく私の魂にしみわたり赤十字を離れて看護職として仕事をする立場である今日まで、事あるごとに判断基準になっている。まさに、有事を越えて人道的な働きをするすべての事象の道しるべであることを、再認識している。

## II. 「いのち」の歴史から看護の原点を探る

ダーウィン（Darwin, 1880）は「進化論」で、人間の祖先はたった一つの細胞から始まっている。生き物が単細胞から始まり、人間に発展するまでに35億年を超えている。しかも、その生物は進化の歴史を繰り返して、生存してきた生物は、宇宙環境の変化に適応したもののみ生き残っている。

人間は、サルのような哺乳類から進化したことが明らかにされてきた。サルの祖先は海と陸の両方で生活する両生類であった。その両生類は、海で生活する魚に、魚はもっと単純な生物から始まっている。このように「いのち」の誕生を遡って行くと、すべての生物は最も単純な単細胞生物から始まっている。

人間の歴史、すなわちわれわれが人間として命をいただき、この世に誕生したいのちは、母親の胎内で胎児として発育する。約10カ月が、単細胞から人間への歴史である。実にミニマムな形態の「いのちの歴史」である。19世紀、ドイツのケッヘル（Haeckel, 1903）は「個体発生は系統発生をくり返す」法則を発見した。人間に限らず、すべての生物も「いのちの歴史」の形成を、必ず初めからたどらなければならない。つまり、原初形態からの発生である。

看護の原点を見つめる時、人間の命は一回性限りのかけがえのない「いのち」であることからの出発である。この「いのち」をナイチンゲール（Nightingale,

1859)は『看護覚え書 (Note on Nursing)』の中で「生命の法則 (the Laws of Life)」として、身体の内部の法則ではなく、外的世界である宇宙と内的世界である身体とのつながりについての法則を見出し「生命の法則」とした。

ナイチンゲールは、人間の身体は外的世界である宇宙と深く結びついていることに強く感動している。すなわち「いのち」とは何かに関わる極めて深い間である。この問題を解く鍵は「いのちの歴史」にある。それは、地球上に単純な生命体である単細胞の誕生から、万物の霊長と言われる「人間」に至るまで、連綿と繋がってきた歴史を持っている。

「いのちの始まり (本田・加藤・浅野, 2007)」から旅してみたい。

生命体の単細胞は太古の地球の歴史から始まった。地球の一部から生命は生まれた。地球は太陽から生まれ、同時に地球から月の惑星が生まれ、月の影響で地球は他の惑星のように冷却現象をまぬがれ、カタマリ(魂)へと転化しなかった。夜があり月の光で今でも生命が誕生している現象を考えると、太陽の作用によって地球の一部が、ある時点で生命化したと言える。太古の地球から「いのち」を持つ生物が分かれ、発展してきたことを考えると、そこには「水」を生み出す地球の惑星の力が生命体の歴史を生み出したと言える。生命体は多量の水を、体の構成物としている。かつてのメディア報道で遭難者が40日間、谷川の水を飲んで生き延びた事実からも、実証出来る。

生命体の最初の運動は、岩にしがみつく固着運動から始まったと言われている。やがて、岩にしがみついで水に流されないためには、固着と水に逆らわない柳に風の動きをしなければ生きていけなかった。この状態の生命体は、海の中のサンゴ、イソギンチャク、クラゲを思い浮かべることができる。さらに、これらの生命体は生きていくためには代謝を繰り返さなければならない。代謝を繰り返し、魚類へと進化した。また、海底で生じた地震活動により岩石は割れ、崩れ、液化現象が生じた。地球の自転・月の引力・太陽の引力は生命体の誕生を大きく加速させた。

魚類の誕生は人間に進化するまでに、生命体の基本的骨格が決まった。初めて生命体に脳が誕生し、運動器官、代謝器官が大きく分化・発展した。湖の中で生活する生命体が、水の流れる海で生活するようになると頑丈な体と強力な運動器官、つまり皮膚・筋肉・骨等を必要とするように変化する。それぞれ異なる器官が運動するためには、一つの目的に沿って動きをコントロールするための体系的な器官を必要とするようになり脳ができた。

進化の本流となったのは、哺乳類から人間へと発展

をくり返していく過程である。その過程で、体全体を運動性の高いものへと発展させた。運動性の高さはやがて、代謝器官、脳神経系の統合器官の発達を促した。

また、哺乳類の誕生について考えてみると、哺乳類の系統発生は柔らかい卵から発生をくり返す。その柔らかい卵は、外界と相互浸透できるように細胞膜が柔らかい。また、哺乳類はオッパイ(母乳)がある。オッパイ(母乳)を飲ませることで、複雑な体の仕組みへと発達した。このようにして、哺乳類から人間へと発展してきたのである。

人間の個体発生は、環境と共に系統発生をくり返す。人間の生まれてくる子ども(赤ん坊)は、環境の変化に合わせて生きていけるように、生まれてから体をつくる必要がある。赤ん坊は、母体を通して環境の変化を情報として取り込みながら、母体の羊水の中で系統発生をして10カ月でこの世に誕生する。こうして環境としっかり繋がって育てこそ、しっかり生きていく力を受け継ぐことになる。

人間が人間として育つための母乳の大切さは、母乳を与える母親が生活している環境の中で育っている食物をしっかりと食べているからである。さらに、世の中の変化に適応できる子どもは、その人なりの脳の働き(行動や思考)が柔軟である。本能に従って生きていない。その人その人の生きる目的を持っている。創造性が高く、個性的である。

- ・人間とはどういう存在なのか
- ・「いのち」とはいかなるものか
- ・いかにして看護行為を意思決定したらよいか
- ・いかにして看護倫理のジレンマを乗り越えていくか

このような疑問を抱いた時、「いのちの歴史」に問いかけてみると、直観のひらめきが生まれるかもしれない。

看護は人間のいのちと向き合う仕事である。看護者が今、目前の人間を「いのちの歴史」を通してその人の存在そのものの全体をとらえる必要がある。

人間が繰り返すすべての物事には、必ずその過程がある。歴史がある。その歴史の過程がわからないと、その物事を全体としてとらえることはできない。いのちの歴史と共に、人間の心の歴史も考えていこう。

この度の東日本大震災の被災者ケアについて考える時、ナイチンゲールが提唱した「生命力の消耗を最小限度に整えるケア」に尽きることに気づいた。例えば避難所で寒さに耐えるために、床のビニールシートの下に何枚も新聞紙を敷きその上に毛布を敷くことで、体熱の放散を抑え体温を一定温度に保つ。また、首にタオルを巻くことで体温を保つことが出来る。寒さと空腹に耐えている人には、温かい飲み物を供給するこ

とで、体内の代謝を促進する。気持ちがふさぎこんでいる人には、誰かがそばにいて一人でない安心感を持つ。それらのすべては、「生命の消耗を最小限度に整えるケア」に繋がるものである。

### Ⅲ. ヒューマン・ケア (Human Care) とは

ケアの対象には、人間ばかりでなく、生物、環境、理念、美術がある。ケアとは、それらへの人間の関わりであり、対象の発展・成長へのかかわりである。ヒューマン・ケアとは、ケアの対象を人間に限定している。医師・心理学者・法律家・看護の専門家は、人間を対象とするケアの役割を持っている。

ヒューマン・ケアに焦点が集まるようになったのは、ナイチンゲール (Nightingale, 1859) 以降、体系的かつ厳密に研究しようとする研究者らにより進められてきた。その代表的な理論家は、ワトソン (Watson, 1988; 2001)、レイニンガー (Leininger, 1992)、ニューマン (Newman, 1994) らである。いずれも邦訳された著書からも読み解くことが出来る。レイニンガーは、ナイチンゲールの著述を通して良い看護の例を多くあげているが、セルフケアを支持する視点を持たなかったことを指摘している。さらに、レイニンガー (Leininger, 2001) の看護ケアリングの探究におけるケアの測定に関する著書からも、ケアリングの複雑性を科学的に明らかにする視点を得ることが出来る。

ヒューマン・ケアの理論家の出現は、看護は医学とは異なる役割と責任を持つことを強調した点において、看護の専門領域を職業として進歩させただけでなく、ヒューマン・ケアの理論的土壌を提供した面で非常に重要であった。看護を一つの専門分野として特徴づけ正当化する、この知識がヒューマン・ケアであり、それが様々な文化的・環境的状况における健康と良好な生活に結びつくとして、レイニンガーは理論をサンライズ・モデルとして構築した。

ナイチンゲールもレイニンガーも環境の重要性に関心を集中させた。ナイチンゲールは、病気は回復過程であるとし、生命力を消耗させないために影響を与えるものとして外的物理的環境を重視する傾向にあった。レイニンガーは、病人が経験したことの全体としての環境状況に焦点を置いた。人間の宇宙内存在としての経験を、物理的環境と非物理的環境 (スピリチュアル・文化的社会的構造および世界観) とした。この点において、ナイチンゲールの焦点化した健康を回復するものとして自然が病人に働きかけることと異なる。レイニンガーは、ヒューマン・ケアのケア・プロセスに文化ケアの相違点と類似点があり、健康あるいは良好な生活状態に影響するものとして援助・安楽といった文化ケアの構成概念をモデル化した。

看護の原点は、「いのちの誕生」からその人がいかに生まれ、どのような成長の軌跡をたどり、「今、ここに」存在しているかの問いからの出発である。人間として誕生したその人は、どのような育ち方をしたのか、どのような生き方をして今日あるのか (存在の価値) を考え、宇宙内で生きているその人の生命力の消耗を最小限度に整えるヒューマン・ケアの提供である。ナイチンゲールは、「清潔な環境」「新鮮な空気」「陽光」「清浄な水」「よく流れる下水」など、環境要因と健康の関係を重要視した。その理論をさらに発展させていったのが先に述べたアメリカの看護理論家達であった。レイニンガーは、人間の経験を宇宙内存在として捉え文化的ケアの重要性を示唆した。ワトソンは、ヒューマン・ケアは道徳的な要請であり人間の成長・発達・幸福・健康・生存を理解したケアは看護の本質に迫るものであるとした。ニューマンは、看護の本質は健康人であれ病人であれその法則は同じであるとした。病気はその人が秩序期と無秩序期の一定の方向を取りつつ生きている時、無秩序期を経て生まれてくるものであるから、病気である時はより高いレベルの秩序、意識、健康に向かう援助とセルフケアのバランスを保つことが不可欠である。

### Ⅳ. 看護の専門家は、他の専門家とどのように異なるケアを行うのであろうか

医師は医学的知識をもとに、心理学者は心理学の知識をもとに、法律家は法律の知識をもとにして、それぞれの役割を果たしている。同じように、看護の専門家は、看護学の知識をもとにしてヒューマン・ケアを行う。

これらのことを看護の中核とされる触れる手に焦点を当てて論じてみたい。

看護の「看」の文字は、「手」と「目」で構成されている。ジャン・ブラン (Jean Brun, 1963) は、『手と精神』の中で手の働きを<把握する>と<触れる>に大別した。

<把握する>とは、われわれが物を把握 (つかみ取る take) すると同時に、文章の大意を把握する (つかむ、取る、得る) ともいう。

<触れる>とは、物に触れる一方で心の琴線に触れる。琴線とは、心に秘められたものに触れることで感動し共鳴する微妙な心情を意味する。

この両者の働きが、われわれの精神の働きと密接な関係があることが推察出来る。

目の働きについては、認識し文章の大意をつかみ取ることはできるが、触れてつかみ取る行為は出来ないとした。

看護の専門家は、あらゆる人に必要とされているケアリングを提供する時、<観察する目>を用いて専門

的な知識に裏付けられたアセスメントを行い、＜触れる（行為）手＞を介して必要とされているケアリングを提供する。

すなわち看護の中の触れる手をTouchとして、その語源をOxford英語辞典から探ると、能動的と受動的に大別され、能動的な面は「触れるという動き、あるいは手・指・身体の一部の行為、物質的な対象への感情的な働きかけ」、受動的な面は「手などの何かを感じる動きまたは行為」とある。Montagu (1971) は、Touchの持つFeelingに注目し「触れることは、その感覚が皮膚を通して神経系・内分泌系・筋骨格系・精神へ作用し、何らかの変化を引き起こす。それらの作用の一つのまとまりを持って表現された時、Touchは身体的な感覚のみでなく、情緒的・情動的に景観される。」とした。

Touchの語源は、フランス語のToucheに由来し、19世紀までTactとして用いられた。Tactは、デリケートに人に触れる意味がある。他人との関係において瞬時にその場の状況を敏感に把握し、状況にそって適切な判断が出来、相手の気持ちを傷つけることなく対処できる。また、人との交流において困難な状況を切り抜ける際の微妙な技術や判断力、あるいは適切な場面でその状況にふさわしい事を言ったり、行ったりする能力ともいえる。

例えばTactの行為は、オーケストラで指揮者が演奏家一人ひとりが奏でる音を美しいハーモニーに完成させるために指揮棒を用いてタクト (Tact) をとると同じ意味合いである。

以上のことから、看護の中の触れる手はその語源をたぐり寄せてみると、触れる主体と触れられる客体の分離を一体化する感覚として特徴づけられる。この感覚は、人間関係の機微に関する情緒的・感情的な意味合いにも用いられてきた。日本語表現の「あうんの呼吸」に通ずるものがある。

1970年代から看護研究の中にtouchの概念が取り入れられた (Bannet, 1970)。その研究範囲は①コミュニケーションとしてのtouch、②人間の発達と健康に関与するtouch、③看護の治療的効果をもたらすtouch、④緊張や不安を軽減するtouch、⑤精神障害者へ必要とされるtouchに分類できる。Touchの看護介入を必要とされる対象者は、不安の強い方、孤独な方、痛みを訴える方、死への恐怖におののく方などである。介入時の心得として、touchを必要とする場合とそうでない場合があることを認識しておくことである。また、触れる場合のマナーを心得おくことも重要である。Touchの研究結果から明らかになったことは、看護ケアとしてtouchのアセスメントを行い意図的に触れる前に、まず言葉をかけることである。Chen (1986) は、CCU・ICU入室者には言語的touchの有効性を明らかにしている。

患者＝看護者の関係づくりとして、コミュニケーションの一手段として触れる場合、部位は手や肩で自然な触れ方は握手、脈拍を取る行為が違和感を双方に与えない。触れる時間は、15～30秒位が良い。また、治療的介入を目的とした触れかたは、触れる側の体温の温かさを痛みのある患部に置くことで痛みが緩和したり、新道 (1987) は産婦のストレス緩和にtouchが影響することを明らかにした。

## V. 看護学を発展させる 原動力となるものは何か

看護の原点を「いのちの歴史」からたぐり寄せ未来へつなぐ方向として「倫理・哲学的な方向性」「実践家としての活動」「今日の社会の要請に応えるために専門職としての責務が果たせる知識・技術の開発」の3点を挙げる事が出来る。

それらのことを実現するためには、論理の追究のみでなく感性・情緒を重んじ、実践活動の根拠を導き出すことである。その根拠を見出すには自然科学の研究手法を用いながら、矛盾のない科学性を追究することが期待される。倫理・哲学的な方向性とは、人間が本来備えている「その人らしさ」を尊重し、安らぎを与えると共に自律を促しながら成長・発達し、人生を生き抜くための支援ができることである。

### 1) 看護学を発展させるもの

- ①ヒューマン・ケアにより疾病の回復を促進できる。治療的活動の相乗効果を期待することもできる。
- ②ヒューマン・ケアには専門的知識の裏付けが必要であることから、専門的知識を対象者の状況へ適用させ活用する意義は大きい。
- ③実践に生かせ、活用できる専門的知識と看護技術は、繰り返しの対象者への看護実践の試みの結果を熟慮することで身につく。
- ④看護専門職としての責務を果たすことが出来るようになるには、知識と技術と道徳・倫理的な教育プログラムを準備する必要がある。道徳・倫理的な教育は、身近に優れた看護者のロールモデルを必要とする。

以上のことから、看護実践を通して遂行することで看護学の重要性は認められるようになる。

### 2) 看護活動は

人々が健康でより豊かな日々の生活を送ることが出来るように

- ①その人の生活過程を支えるエネルギー
  - ②行動を支えている感情や意志・価値
  - ③共に生きる絆の強さ
  - ④自から苦痛やストレスを緩和する対処能力
  - ⑤健康についての探究行動
- 等を理解し、専門的なケアが必要な人々に働きかけ

ることである。

その働きかけのために、効果的かつ人々が求めている適切なケアが提供できるためには、適切なアセスメントが求められている。看護活動はアセスメントに始まり、看護実践の効果を評価・修正しながら人々の求めている適切なケアが提供されたか、再アセスメントを行う。看護活動を通してアセスメントする能力を熟達し、看護実践能力を高めるまでには長い時間を要することになる。

## VI. まとめ

これまで積み重ねてきた私自身の研究過程をふり返って見た時、看護学の中のケアリングとしてホリスティックケアの追究に視点をあててきたことに気づいた。その原点は、ナイチンゲール『看護覚え書』にも見出すことができる。いかなる場合にも、「自然治癒力の消耗を最小限に整えるヒューマン・ケアの追究」を目標としてきた。それらの具体的な形として「タッチの研究」「園芸療法」「音楽療法」をあげることができる。これらを看護学のケアリングとして成り立たせるために、それぞれの専門領域のエキスパートらと連携した研究を行ってきた。

特に「タッチの研究」では、国内外の文献研究から始めたため、ヒューマン・ケアに欠かせない「いのちの歴史」「医学の歴史」「人間の皮膚の研究」「看護の歴史」を紐抱かざるを得なかった。人間の皮膚の研究は17世紀まで盛んに行われていたが大掛かりな研究機器を必要とするため中止された歴史があった。皮膚は人間の全身を覆うマントのようなもので、皮膚を通して外界の環境との相互浸透を行い危険をいち早く察知し、危機状態を回避できることも多い。その皮膚から自然界の刺激を受けた時、人のいのちはその感覚をどのように感じ取り表現するであろうか。私が日常生活の中で実感した事を「詩情」で表現してみたい。

手を広げると風が感じられる  
全身の皮膚から自然の中の気流を感じる事が出来る  
森の中を歩くと  
香りたつ風・気の流れを感じる  
それは  
肌（皮膚）に心地よい  
人と人の関係は  
その外観から雰囲気を感じ取る  
雰囲気とは  
その人が脳（こころ）に抱いている心の作用から醸し出されたものである  
それをキャッチする人に  
雰囲気は様々なインパクトを与える

その関係の雰囲気を測ることはできるであろうか

美しいものは無条件に美しい  
なぜ美しいかを説明しても伝えることはできない  
その人がその人の文化的環境の中で感じている美しさを  
その人と同じように感じ取ることはできない  
美しいと感じ取るものは形にならない  
役に立たない  
美しいものはそこに存在するから意義があるわけではない  
しかし  
美しいものに出会うとほっとする  
美しいものは安らぎを与える  
やすらぎを与えられるということは  
美しいものには命（いのち）があるからである  
命（いのち）は感動を与える

看護の中の触れる手／ケアリングと響き合うものがある

人々のケアニーズを充足できるケアを提供するために、看護ケアの中核となる看護者の触れる手について、これまでの研究成果を振り返ってみた。その原点は、「人のいのちが輝くケアとは」の間からの出発であった。地球上に命が誕生した時へとさかのぼり、万物のいのちの旅から人類の誕生を考えた時、その核となるケアの本質はやはりナイチンゲールの「人のいのちを最大限輝かせるために、その人の生命力の消耗を最小限度に整えるケア」にたどり着いた。人は苦痛の中の一瞬でも、快適なやすらぎ、爽快感、充実感を味わうことが出来るケアを受けたとき、生きる希望を抱くことが出来る。生きている幸福を実感する。そのようなケアリングを追究してやまない。

## 文献

- Bannet, E., K. (1970). The development of atheoretical construct of the concepts of touch as they relate to nursing.
- Brun, J. (1963) / 中村文郎 (1990). 手と精神. 東京: 法政大学出版局.
- Chen, G., L. (1986). Effects of touch on anxiety ; Levels in coronary care patients.
- 本田克也, 加藤幸信, 浅野昌光, 神庭純子 (2007). 看護のための「いのちの歴史」の物語; 現代社白鳳選書20. 東京: 現代社.
- Leininger, M., M. (1992) / 稲岡文昭監訳, 筒井真由美他訳 (1995). レイニンガー看護論; 文化的ケアの多様性と普遍性. 東京: 医学書院.
- Montagu, A. (1971). Touching ; the human

- significance of the shin, 2th Ed. NewYork :  
Colombia University Press.
- Newman, M., A. (1994) /手島恵 (1995). マーガレット・ニューマン看護論－拡大する意識としての健康－. 東京：医学書院.
- Nightingale, F. (1859) /湯槇ます, 薄井坦子, 小玉香津子訳 (1968). 看護覚え書. 東京：現代社.
- Pictet, J. (1955) /井上益太郎訳 (1958). 赤十字の諸原則. 東京：日本赤十字社.
- 新道幸恵・近藤潤子 (1987). 産婦のストレスの緩和に対するtouchの影響. 日本看護科学会誌, 7 (1), 29-38.
- 浦田喜久子 (2010). 赤十字の看護と赤十字看護学会への期待. 日本赤十字看護学会誌, 10 (2), 43-46.
- Watson, J. (1988) /稲岡文昭・稲岡光子訳 (1992). ワトソン看護理論. 東京：医学書院.
- Watson, J. (2001) /筒井真由美監訳 (2003). ワトソン看護におけるケアリングの探究－手掛かりとしての測定用具－. 東京：医学書院.